

Varivasyārahasya におけるマントラ論

井 田 克 征

0. ヒンドゥータントリズムの特徴の一つとして、儀礼や瞑想において用いられる多種多様な象徴が挙げられる。そしてそれらの象徴をどのように解釈するかということは、タントラ文献における一つの重要なテーマであった。中でもマントラに関する考察はカシュミールシヴァ派及びその影響の元に成立したシュリークラ派において極めて複雑に発展した¹⁾。本稿の目的は、シュリークラ派におけるマントラ解黙を考察することによって、彼らの教義の特徴の一端を示すことにある。その際に参照するのは Bhāskararāya によって著された *Varivasyārahasya* (VR) である²⁾。これは 17 西紀のテキストではあるが、シュリークラ派のマントラ論を取扱ったものとしては *Yoginīhrdaya* (VR) の二章と並んで重要なものである。

1. VR では、主に śrīvidyā と呼ばれるマントラの構成及び解釈を取り扱っている。シュリークラ派においてこのマントラは主尊トリプラスダリー女神を表すマントラであると考えられており、それゆえ全てのマントラの中で、最も重要な位置を占めている。それは次のような三連からなる音節の集合として構成されている (1.9-13)。

ka e ī la hrīm / ha sa ka ha la hrīm / sa ka la hrīm

このマントラの三つの連には、始めから順に vāgbhavakūṭa, kāmarājakūṭa, śaktikūṭa という名前が与えられている。そして全体では 15 の音節からなっているため、それはしばしば pañcadaśī mantra とも呼ばれる。そしてこのような、通常の言葉としての形を持たない、単なる音節の集合にしか見えないこの śrīvidyā は、最高女神を意味するものであり、さらに言葉としての姿をとった女神の微細な顕現に他ならないという³⁾。これを説明して VR は、śrīvidyā の示す意味に関する 15 通りの解釈を示している。これらの解釈において、śrīvidyā には様々な神学的意味付けがなされるが、しかしそのように異なった解釈も決して相互に排除し合うようなものではなく、究極的に世界の原因であるトリプラスダリー女神⁴⁾を意味するという点で一致する。

2. 本稿では VR で説かれる 15 通りの解釈の中の一つ, “gāyatrī としての意味” について考えてみたい. この解釈において śrīvidyā は gāyatrīmantra の秘密の形態であると理解される⁵⁾. gāyatrīmantra とは, *Ṛgveda* 中のサヴィトリ神賛歌の一編で, そこだけ取り出して様々な儀礼に広く用いられるもので, これはしばしばヴェーダの真髄であるとも言われる. これは 3 連 24 音節からなる gāyatrī 韻律で記されているので, gāyatrīmantra と呼ばれるのであるが, 次のようなものである.

tat savitur vareṇyam bhargo devasya dhimahi /
dhiyo yo naḥ pracodayāt // (RV. 3.62.10)

VR によれば, śrīvidyā はまさにこの gāyatrīmantra に他ならない (1.6-7). それは śrīvidyā の各音節と gāyatrī の各語との対応関係を示すことによって説明される. 例えば vāgbhvakūṭa の部分と śrīvidyā は次のように一致している. 「ka 文字は, 望む者である彼, つまり Kāma brahmā であり, “tat” の語を意味する. 二番目の文字 (e) の意味は, “savitur vareṇyam”, つまり最高に優れた Savitṛ である. [アルファベットの] 第四の [文字 (=i)] の意味は, “bhargo devasya dhi” であり, すべてに内在し, 保持する者である. la 文字は “mahi”, つまり大地である. māyā (=hrīm) は第三連と第四連 (parorajase’sāvadom) を意味している⁶⁾. (2.60-61)」ここでは, 先に挙げた三連の gāyatrī に 「parorajase’sāvadom」 という第四連が付加されている. Bhāskararāya は, この四つの連を持つ gāyatrī が「完全な gāyatrī」であると述べ, さらにこの四連の gāyatrī をタントラ的に読み替えている. その解釈の過程を詳細に述べる紙幅はないが, 最終的には, この gāyatrī は最高女神, すなわちトリプラスンダリー女神の性質を示していると解釈される. それによれば女神は, Śiva であり, Śakti であり, 一切の保持者であり, 五大元素として顕現した者であり, 無分別知を生む者であり, guṇa を超超した者であり, ヴェーダによって間接的に知られる者であり, Brahmā · Viṣṇu · Rudra からなる者である, 最高の実在として考えられる (VRP. p.39). śrīvidyā は, 直接的には gāyatrī を表示し, 間接的にこの最高女神を意味しているのである.

3. Bhāskararāya はこのように śrīvidyā と gāyatrī との本質的同一性を主張し, その解釈の中で, gāyatrī にタントラ的な意味を与えている. ここで明らかなのは, 正統的なヒンドゥー思想の側からは異端として排除されたタントラのテキストにおいて, ヴェーダ聖典の権威は否定されていないという事実である. こうした傾向は, 初期のテキストにおいても散見されるものである (YHD. p.99.)⁷⁾ が, Bhāskararāya においては顕著である. しかしタントラがヴェーダを引用する方法は常に自

らの体系の下にヴェーダを組み込むような形で行われる。つまりタントラは自らを権威付け、正統性を主張するために、ヴェーダの権威を利用するのである⁷⁾。彼らがヴェーダやウパニシャッドに言及する時、それは常にタントラ的なコンテキストの中に再解釈されたものであって、その意味ではヴェーディズムとタントリズムの間に思想的な連続性は存在しない。このように、先行する思想をタントラ的に再解釈し、自らの教義の中に位置付けるやり方はシュリークラ派においてしばしば見出されるものである⁸⁾。

-
- 1) *Varivasyārahasya of Śrī Bhāskararāya*, ed. and tr. by Subrahmanya Sastri, Adyar, 1948.
 - 2) シャイヴァのマントラ論としては A. Padoux, *Vāc*, SUNY, 1990.
 - 3) W. T. Wheelock, "Mantra in Vedic and Tantric Ritual" in *Mantra*, SUNY, 1991, p. 117.
 - 4) シャークタの世界観では、Śiva と Śakti の合一を原因として、そこから世界の一切が展開論的に生じるとされている。この両者が合一した究極的状態が、高原理として、トリプラスンダリー女神と同一視される。
 - 5) "gāyatrī としての意味" は、VR 以前に *Tripurātāpīṇī Upaniṣad* に簡単に述べられている。しかし YH や *Tantrāṅgatantra* には見出されず、新しい解釈だと思われる。
 - 6) これ以降テキストでは Kāmarājakūṭa, śaktikūṭa に関しても、gāyatrīmantra との対応関係を論じているが、ここでは省略した。
 - 7) これに関しては引田弘道『ヒンドゥータントリズムの研究』山喜房書店, pp.29-31 参照。
 - 8) 特に Bhāskararāya の著作では、Advaita の理論を焼き直す例が目立つが、その際に最高女神は Brahman として言及される。

〈キーワード〉 タントラ, マントラ, シャークタ, varivasyārahasya

(金沢大学大学院)